

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2004年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長満たき、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakiunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakiunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	2004年の歌会・歌合(全て自歌会・自歌合)	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:4首 歌人数:1名 自歌数:4首	『四季恋歌』(しきれんか)			評	派生歌など
2004		四季の恋を詠んだ歌である。 自撰				
2004/9/20	春恋	春ならば身は梢よりうぐひすよ かをらぬ梅に声ばかり鳴く	春に喩えるなら、恋人の来ない 私の身は、梅の枝よりも憂鬱で しょう。梅の花は咲き、私の身は 咲かないから。まだ咲き香ってい ない梅の枝に、ひたすら鶯は鳴 き、私も泣く。	◇掛詞 「う(ぐひす)×憂」	◆定家流の妖艶美性 がすでに一つの歌風 としての確立を見せ つつあるのではない か。ただし、梅に関す る語「梢、梅」と鶯に 関する語「うぐひす、 声」とを上下句に分解 して掛詞にするなど、 難解に過ぎた技巧に よる歌意の崩れのき らいあり。 (園井長光)	
2004/9/21	夏恋	飛ぶ蛍かがよふたびに同じ袖 羽は我が身のほどは泣かねど	飛び交う蛍が光を放つたびに、 同じだけの光が私の袖に映る。 袖は涙で濡れているから。蛍の 羽の音は、私の身の泣き声より ずっと小さいけれど。		◆女性の孤独に対す る観察結果を、季節 感と共に三十一字の 中に閉じ込めようとす る、詠歌の本能や愛 情のようなものが感じ られる。 (園井長光)	

2004/9/22	秋恋	秋のよそ風の吹くことなかりせば嵐のほどの今許さまし	秋のほかに風が吹く季節というものがなかったら、一年分の風をまとめたような今の秋の嵐を許しましょう。あなたに飽きられるのが今だけなら、時間が経てば戻ってくれるなら、嵐のような今の別れ話を許しましょう。	◇掛詞「秋×飽き」		
2004/9/23	冬恋	雪霰名のいづれかは何ならずとてもかくても降れる袖かな	雪か霰か、どう言うべきか分からない牡丹雪が降る中、とにかく、私の袖にも牡丹雪のように重々しく湿った涙が降っている。		◆实景一辺倒ではなく、恋愛心理に内攻させた雪や霰の冷たさ。 (長満たき)	